

『恋人の聖地』というものがこの国には百箇所以上存在している。

なんでも、NPOがプロポーズするのに相応しい美しい場所を定めたものらしい。

恋人の聖地というネーミングなのに、恋人を通り越させる気満々である。

そんな恋人の聖地の四十四番目となるのが、佐賀県玄海町にある、浜野浦の棚田だ。海へと至る階段のような大小様々な棚田が傾斜に広がる、とても美しい場所。

四十四……死に別れ等を連想させ数字としては不吉であるものの、死二人を別つまで、否、死して尚寄り添えると考えたと、何とも強い愛の表れのように思う。

「春香、次の旅先は此处にしようか」

「うん！ ……秋臣くんが決める場所は、いつも素敵だから楽しみ」

公式ホームページに掲載された写真を見せるように、パソコンの画面を向けながら最愛の彼女である桜井春香に旅先の提案すると、肩口まで伸ばされた淡い栗色の髪を揺らしいつものように無邪気に微笑んで頷いてくれた。

彼女の了承を得て、僕はいつもの面々に連絡を取る。僕達は飲み会等をしない代わりに、定期的に集まっては一泊二日程度の旅行をする。それが仲間内でのコミュニケーションの取り方だった。

途中で転校してきた春香も含め、皆小学校からの腐れ縁。

桜井春香(さくらい はるか)

東夏樹(あずま なつき)

槻秋臣(けやき あきおみ)

松浦冬子(まつうら とうこ)

小学校の学区が同じくらいの近所に住んでおり、偶々名前にそれぞれ四季が入ってい

たことも、僕達が仲良くなる切っ掛けだった。

高校進学時から進路がバラバラになったものの、社会人になった今でもこうして定期的に連絡を取り合い、休みを合わせて旅行に出る仲。

彼等もまた、僕の提案する行き先に反対することなく、トントン拍子にスケジュールが決まった。

僕がしばらく多忙だった為、このメンバーでの旅行は久しぶりだ。

旅行の楽しみは、事前準備から始まる。

今回の行き先は九州北西部にある、佐賀県玄海町だ。初めて行く土地については、事前に調べておく必要があった。気候に合わせた服装、宿の手配、交通機関の確認。

飛行機のチケットや宿の予約は夏樹が申し出てくれた。彼は社交性もあり明るい人柄故、色々な情報が集まる。きっといい宿やお得な交通機関を見つけてくれるだろう。

僕は僕で、身体が丈夫ではない春香に無理をかけないよう、荷造り等出来る事は全てしておく。

先に眠ってしまった春香の喜ぶ顔を想像して、旅のしおりも用意した。

多少の準備期間はあったものの、あつという間に旅行当日。

飛行機での移動を経て、僕達は九州佐賀国際空港へと降り立った。

久しぶりの空の旅では、事前準備で張り切りすぎたせいかすぐに眠ってしまった。飛行機は混んでおり、春香と席が離れてしまったのも原因だろう。彼女の居ない時間は屈だ。

「あー、やっと着いた！ 狭い座席ってめっちゃ肩凝るよね……俺も歳かなあ……」

「同い年でしょう。私の事も年寄り扱いする気？」

「あー！ うそうそ！ とーちゃんは出会った頃から変わらず若くて綺麗だよ！」

「……出会った頃って……小学生じゃない」

空港に降り立ち、大きく伸びをした夏樹に対し呆れたように溜め息を吐くのは、腰まで届く長い黒髪に清楚で控え目な服装、それでいて地味になりすぎない洗練された雰囲気美人、冬子。

彼女とは真逆の、明るい髪色に幾つもピアスをしてラフな装いをした、人好きのする笑みを浮かべた如何にも社交性の塊と言った様子の夏樹。

パツと見は清楚な大和撫子とチャラ系のパリピ。正反対の二人だが、こんな風に軽口を叩き合える仲だ。

そんな彼らのやり取りを見て、二人とはまた違うほんわかとした可愛らしい雰囲気、春香はくすくすと楽しげに笑う。久しぶりに皆で集まったのだと実感した。

「ねえ、秋臣。目的地の……玄海町、だった？ 此処から遠いの？」

「嗚呼、レンタカーを借りて……迷わず行けて一時間半くらいかな。簡易マップとかおすすめの観光地とかを纏めたしおりに作って来たから、各自目を通して気になる所があれば教えてくれ」

「しおり……いつの間に作ったの？」

「わあ、張り切ってるね、あつきー流石！」

「相変わらず真面目ね……でもまあ、しばらく大変だったし、こんな準備が出来るくらい落ち着いてよかったわ」

ホチキス止めされた手作りのそれを夏樹と冬子にそれぞれ手渡し、僕は春香に開いて見せる。覗き込む春香の表情は期待に満ちていて、僕は作って良かったと笑みを浮かべた。

彼女の小さなハンドバッグにしおりを入れさせる訳にはいけないので、彼女の分も僕が持つことにした。

リュックに二冊のしおりをしまい、搭乗時預けた大きな荷物を回収し、空港を出る。春香の分の荷物も詰めた大きなトランクを引き摺りながら、近頃の不摂生が祟ったのか、少し体力が落ちたかと小さく息を吐いた。

レンタカーを借りて流行りの音楽を適当に流しながら、夏樹の安全運転に揺られる。助手席の冬子にナビを任せ、後部座席から初めて訪れる土地の町並みを眺めていると、窓ガラスに映る春香の丸い後頭部が目に入る。

反対側の窓から外の景色を眺める彼女とこっそり手を繋げば、夢中になっていた景色から意識をこちらに向け、照れ笑いを返してくれた。

「結構端の方まで行くのね？」

「海沿いの町だからね。けど、寒暖差も少ないし温暖な気候らしいよ」

「ふうん？　なら過ごしやすそうね。さつきしおりを見たけど、特産品もどれも美味しそう」

「あー、それなー！　お腹空いてきた……俺あれ、佐賀牛。丸ごと食いたい」

「何言ってるの、海沿いの町なんだから鯛や牡蠣でしょう」

「わたしは苺……！」

「さがほのかって品種の苺が有名だけど……淡雪って言う白い苺もあるらしいよ。春香が好きそうだ」

「わあ、白……ピンク？　可愛いねえ」

「……、……よし！　明日もあるんだし、折角だし全部食べればいいよね！」

久しぶりの空気を楽しみながら、しばらく車を走らせて目的地である玄海町に到着した。

佐賀県では一番人口の少ない町らしいが、人の少なさからの寂しさを感じさせない、何処か田舎を思い出させる暖かみのある町並みだ。

先ずは宿に荷物を置きに行く。普段旅先でよく利用するホテル等とは違い、旅館や民宿と呼ばれるような、縦ではなく横に長いフォルムのレトロな外観の建物だった。

夏樹が気を利かせて僕と春香を同室にしてくれたようで、借りた三室にそれぞれ分かれる。案内された少し広めの和室は、何処か懐かしい畳の匂いがした。

春香と二人此処でのんびり過ごすのも悪くない。そう思ったが、今日はこれから散策だ。大きな荷物を置いて、スマホやデジカメ等最低限の荷物を詰めたリュックを片手に部屋を出る。

食べ歩きをするからと言う理由で食事なしの素泊まりで宿を取っていたものの、宿屋の人は皆にこやかに対応してくれた。

夏樹は既に玄関で待っており、僕達にだけでなく通り過ぎる従業員に対してもフレンドリーに手をひらひらと揺らしていた。

彼の隣で靴を履き替えていると、玄関先で一人の女性従業員に声を掛けられる。

「あらお兄さん！ 前にも泊まりに来てくれてたわよね？ 可愛らしいお嬢さんと。…今日はお友達といらしたの？」

てつきり夏樹に話しかけてるのかと思いきや、彼女の視線は靴を履き終わった僕へと向いていた。

思わず、怪訝な顔になる。

「え……？」

「そういえばあつきー、はるちゃんと来てたっけ？ 通りでこの町について詳しかった訳だ！」

「……？ いや、僕は……。……人違いです」

「あら、そう？ 似ていたものだから……ごめんなさいねえ」

人見知りをして背に隠れていた春香を振り返るけれど、彼女も戸惑った顔をしている。平均的な背格好の優男。良く居る顔だ。きっと人違いだろう。そう結論付けるのに、夏樹の複雑そうな顔に何と無くもやもやとする。

そう言えば、最近髪を切っていない。首を振った際に触れた前髪が少し邪魔だった。きつと前髪で顔が見えにくいから間違えられたのだろう。旅行から帰ったら散髪に行こうと心に決めたところで、別の声が掛かる。

「お待たせ、行きましょうか」

少し遅れて合流した冬子は、わざわざ散策しやすいようラフな服装に着替えをしていた。

美人はどんな服装も似合う。素直にそう褒めると、少し照れたように視線を逸らされた。

外に出ると改めて感じる温暖な気候。

北の地から南へ来ると、こうも空気が違うのかといつも驚く。

まだ五月。春先だというのに、地元との温度差に歩き続けるとじんわりと額に汗が滲んだ。

体力が落ちたせいかもしれないと思ったが、どうやら冬子も同じ意見だったようだ。長い髪を一纏めに手で持ち上げ首回りに空気を通していた。

「やっぱり地元より暑いわね、九州。……冷たいものが食べたいわ」

「あ、それなら、ブラックモンブランでも食べようか」

「……？ 何それ、ケーキ？」

「あ……わたし、それ好き。チョコのざくざくの」

「九州で定番のローカルアイスらしいんだけど……確か発売元は佐賀県の実業会社だったはず。そのコンビニにもあるんじゃないかな」

「あつきーマジ詳しいよね、そういうのって、調べたりしてんの？」

「前に来た時に偶々春香が気に入って……、いや……前っていつだ。佐賀は初めてのはず……別の県か？九州地方なら何処にでもあるしな……」

近頃多忙だったこともあり、前のこととなると記憶がどうにも曖昧だ。

「秋臣くん、疲れてるから無理しちゃダメ。ね？」

「嗚呼、そうだね。ありがとう、春香」

思い出そうとうんうん唸っていると、春香が腕に抱き付いてくる。此方を見上げ首を振る様が愛らしい。

どうやら心配を掛けてしまったようだ。考え込むのをやめ、一息吐く。

「あつきー！お待たせ。さつき言ってたブラックモンブランと、あとジュースとか買ってきたからさ、どっかで休も？」

「わあ、ありがとう！」

「ありがとう、お金は後で払うよ」

「全国のコンビニでローカル品が買えるのって新鮮ね」

いつの間にか買い物済ませてくれていた夏樹と冬子に礼を言いつつ、きよろきよろと辺りを見回す春香が近くの施設に気付き目を輝かせる。

事前に調べた観光スポットにあった、エネルギーパークと言う施設だろう。春香の反応から直ぐに行ってやりたい気もしたが、折角のアイスが溶けてしまうので先に食べる事にした。

公園内のカラフルな子供向けの遊具に腰掛けながら、ざくざくとした克蘭チをまぶしたチョコレートでコーティングされた、さっぱりとした甘さ控えめのバナナアイスを頬張る。

僕にはそれでも少し甘いが、春香はお気に召したようだ。夏樹と冬子も各々啞えながら、今日の予定について改めて確認する。

もう昼を過ぎている為、メインの目的地だった恋人の聖地は明日にとっておくことにし、今日はこのエネルギーパーク見学をしてから、今日明日に分けて二人の食べたがっていた牛肉と海鮮を食べることにした。もちろん、デザートには春香の望んだ苺だ。

玄海エネルギーパーク。

いくつかの施設の集まったこの観光スポットは、エネルギーという名の通り原子力発電所が隣接している。

普段あまり馴染みのないエネルギー。その原子炉の廃熱を利用しているという巨大な観賞用温室は、くつろぎをコンセプトにしているらしい。

種類豊富な植物達に囲まれ、僅かに傾いた陽を受け緑を輝かせる様子を眺め、時間を忘れて癒される。

他に客も居なかったため、僕達は各々写真を撮ったり植物を眺めたりして一時の休息を過ごす。

遠くの方で、夏樹が冬子にスマホのカメラを向けているのが見えた。

温室と言うだけあり、外気よりも暖かい。喉の乾きを覚え、先程夏樹が買ってくれた飲み物を出そうとリュックを漁ると、一緒になって出てきた旅のしおりを落としてしまった。

地面に散らばる二冊のしおり。

僕と彼女の分だ。

けれど、片方だけどうにも、使用感がある。今日空港で見ただけのそれがやけにぼろぼろなのに違和感を覚え開こうとすると、春香が喉が乾いたと急かしてくる。

はいはいと困ったように笑いながら、しおりについた土を軽く払ってリュックに戻し、

本来の目的であるペットボトルを差し出した。

未開封の自分の紅茶を渡してから、ふと気付く。

そういえば、彼女の分の飲み物は何処にしまっただろう。彼女の分は、夏樹は何を買ってくれていただろう。

少し前のことなのに、愛しい春香のことなのに、記憶が曖昧だ。

やはり、疲れているのかもしれない。

次いで館内マップを見て冬子が気になると言った場所は、白石記念椿園。

残念ながら見頃は十一月から三月までとのことで花は見られなかったが、冬の時期には約八百本もの椿が咲き誇るらしい。

太閤椿と言われる立派な樹の幹を拝むことが出来た。波のようにうねる、力強く大地に根付く樹に、皆一様に感嘆する。

「樹齢四百五十年……やば、人生五回分くらい？」

「圧巻ね……」

「太閤……秀吉がこの土地に城を築いた頃から咲いていたと伝えられて、この名がつけられたのか……」

「……周りがどんどん変わってくのに、自分だけずっとここで咲いてるの……どんな気持ちかなあ……」

この樹は冬の時期に赤い花をつけるらしい。見られなかったのは残念だが、丸ごと落ちる椿の散り方は少し苦手なので、完全に終わった今で良かったとも感じる。

花ごと完全に落ちる椿は確かに潔いものの、まだ美しいのにと名残惜しく感じてしまう。出来るだけ美しいまま永らえさせてやりたいと、やるせなくなるのだ。

「……嗚呼、赤い椿の花言葉は『控えめな素晴らしさ』『謙虚な美德』らしいね。……春香にぴったりだ」

「わたし、控えめ……かな？ 確かに人見知りはあるけど……」

「あら……椿の裏花言葉は『罪を犯す女』よ。……椿にも春が含まれるものね。春香は、どんな罪を犯しているのかしら？」

冬子の言葉にびくりと肩を揺らす春香を、思わず背に庇うようにする。

僕の身体を通して春香に向けられるその視線と、おろおろとした夏樹の様子に首を振った。

「春香に罪なんてあるわけないだろう？」

「……今だって、あなたの心を縛ってるわ」

「何……？」

「まあまあ、とーこちゃん！ あつきー！ 疲れちゃったしちよっと休もつか、ね？」

夏樹にぐいぐいと背を押されて館内へと移動することにし、室内で座って休める場所を探した。

九州ふるさと館に入ると観光情報等が掲載されているギャラリーに椅子を見つけ、僕と春香はそこに腰掛ける。

夏樹は有田焼の美しいからくり時計を眺めている冬子の隣に立ち、何かを話しかけていた。

昔からこういう時に皆のムードメーカーや潤滑油になってくれる、気のいいやつだ。暫く夏樹と話をして落ち着いたのか、冬子がしおらしく此方へとやって来る。

「あの……秋臣、ごめんなさいね、私……」

「嗚呼、いや。僕は構わないよ。謝るのなら、春香に」

「……………。ごめんなさい、春香」

「ううん、わたしも平気だよ！ 冬子ちゃん、顔上げて？」

少しの間頭を下げ続けた冬子は、夏樹に背を叩かれ顔を上げる。良くできましたとばかりに夏樹が満足そうに笑みを浮かべていた。

やつぱり良いコンビだなと感じたものの、実のところ夏樹は冬子に中学の頃から何度もフラれているのだ。

冬子には他に好きな人が居るが、そちらも完全な一方通行で脈がないらしい。彼女のような美人を意識しないということは、既に彼女持ちだろうか。

何度フラれても想い続けてくれる夏樹と結ばれば、不毛な片思いをせずに済むのになと思ってしまう。

実を言うと、恋人の聖地を今回の目的地に選んだのは、そういった目論見もあったのだ。

一通りパーク内を散策して、すっかり夕方だ。赤く空を染め上げる夕焼けが眩しい。少し早いが、昼は機内や道中で軽く摘まんだ程度なので夕食にすることにした。夏樹から牛が食べたいと聞いた時点で調べて予約していた店へと向かう。少し距離があるのでレンタカーを取りに行こうかとも悩んだが、これからたくさん食べるのだ、落ちた体力を取り戻す為にも歩くことにした。

二十分以上かけて到着したのは、中山牧場という佐賀牛の食肉加工所併設の直売所だ。そこで新鮮な肉を買って、敷地内のレストハウスでバーベキューが楽しめる。そこは要予約とのことだったが、客入り状況にもよるのであろう、平日ということもあり当日予約で間に合っただけ良かった。

予めおおよその時間は伝えていたため、春先とはいえ陽が落ちては少し肌寒さもある

だろうと、今回は屋外ではなく室内の座敷にて席を用意してくれた。心遣いがあるがたい。

備品も代金さえ払えば紙皿やコップ、箸なども完備されているらしく、手ぶらでバーベキューらしさが楽しめるのも旅行者には嬉しい。

僕達は折角なので一番高いバーベキューセットを注文し、さらに直売所で選んだ肉も焼く。おにぎりやハンバーグ、名産である佐賀牛を味わった。

「佐賀牛って黒毛和牛なんだね？ 高級品って感じ……脂が蕩けてめっちゃ甘い……！」

「本当ね、旨味がたつぷりで……、さつき写真を見たけれど、凄くつぶらな瞳をしてたわ……」

「可愛い牛……美味しい……」

「可愛いと美味しいは両立するんだな……」

広い畳の室内でのんびり寛ぎながら肉を焼く、とても贅沢な時間だ。酒を飲むと帰り道を歩ける自信がないので、お茶で我慢する。

夏樹はソフトドリンクが飲みたいと言って、店外の自販機まで買いに出た。春香もそれにについていった。

冬子と二人きりになり、先程の事もあり少し気まずそうな視線を感じる。

「……ねえ、秋臣。さつきはごめんなさい」

「嗚呼、構わないよ。春香ももう気にしてない」

「……。でも私……やっぱり良くないと思うの。あなたが安定してるのは嬉しいんだけど、こんなの、いつか破綻するわ……」

「……？ 何のことだ？」

「春香のことよ！ ……あなたも、本当は、わかってるんじゃないの？」

「ちょっと待ってくれ、話が見えない……」

真剣な面持ちの彼女に、何となく胸がざわりとする。問い質そうとしたところで、不意に廊下から夏樹と店員であろう女性の声がした。

「すみません、お客様。お電話頂いた機様からは、四名様でと伺っていたのですが……」

「あー、すみません！ 間違えちゃったみたいで。三名に直しておいて貰えますか？

……あ、でもそっか、人数分用意してくれてますよね、大丈夫です、四人分食べます！」

三名？ 何のことだ。

僕と、春香と、夏樹と、冬子。

間違いなく四名だ。

酒など飲んでいないのに、不意に視界がぐらついて、頭が痛む。

そのまま畳に倒れ込んで、遠くから冬子の悲鳴と、夏樹の駆け寄ってくる足音。春香の声を聞いた気がして、……そこから先の記憶がない。

夢を見た。

小学生の頃。近所ということで親同士も仲が良く、いつも遊んでいた夏樹と冬子、それから、転校してきたばかりで上手く馴染めずにいた春香。

日焼けした田舎の子供達の中であまりに白く弱々しい、人見知りで泣き虫だった彼女。放課後の近所の公園。周りの子供達が遊具で遊ぶ中、一人ベンチで泣いていた。

夏樹達と遊んでいた僕は、彼女を見かねて一緒に遊ぼうと声をかける。

「ねえ、いっしょにあそぼう？ 僕、秋臣」

「……え、あ……わたしは、春香……」

『春』なんだね！ いっしょにあそんでる子たちは、『夏』と『冬』が名前につくんだ

よ！」

「……！　そう、なの？　……じゃあ、わたしが入っても、じゃまじゃない？」

「もちろん！　みんなも四季がそろったってよろこぶよ！」

「……うん！」

手を差し出すとその泣き顔が驚きに変わって、やがて春の花が綻ぶように笑顔に変わった瞬間、僕は彼女に恋をしていた。

中学に上がって、可愛らしく成長した春香は、変わらず僕の後ろをついて回った。

夏樹は冬子に告白して、あっさりとフラれて、それでも僕達四人の関係は変わらなかった。

クラスや部活や塾、自分の周りにそれぞれ世界が広がっても、地元の祭も、夏休みや冬休みも、いつも四人一緒に過ごした。

思春期の男女だ、色恋によって僕達の関係も変わってしまうのではと春香への気持ち隠していたものの、フラれても尚変わらないう夏樹のアピールや告白に後押しされる形で、高校に上がる前の春休みに彼女に告白して、晴れて恋人になった。

進学によりバラバラになった四人だったが、皆実家住まいだったため近所でよく偶然顔を会わせたし、相変わらず長期休みには予定を合わせちよくちよく会っていた。

何度目かの夏樹の失恋、冬子の進路相談、春香と同じ大学に進んだこと、今も変わらず続く四人の思い出。

けれど何故だろう。幼い頃のことにはこんなにも鮮明なのに、ここ最近の思い出は断片的だ。

まるで未完成のパズルのように、途切れ途切れにノイズがかかる。近頃多忙だったからだろうか。四人で会うのは久しぶりだったから？

そういえば、不摂生が続くくらいの多忙って、一体何があったんだ？

記憶の混濁の中、それでも春香の笑顔だけは満ちていて、思わず手を伸ばす。

決して触れられず浮かんでは消えるそれに、まるで走馬灯のようだと感じた頃、ぼんやりと意識が浮上する。

「……はるか……」

「！……あつきー、大丈夫……？」

「……夏樹？ ……僕は……」

「まだ寝てて良いよ。ここは宿、タクシーで運んだんだ。……あつきー、急に倒れちゃつてさ。旅の疲れもあったのかもね。もう夜中だし、朝まで休んでいいから」

「そうか……せつかくの旅行だって言うのに、ごめん」

「んーん、いいよ。今回も、あつきーが久しぶりに誘ってくれて嬉しかったからさ」
ずっと付き添っていてくれたのであろう夏樹が大きく伸びをして立ち上がる。女子は

別の部屋で休んでいるのだろうか、もう完全に夜も更けていた。

「じゃあ、俺隣の部屋だからさ、何かあったら呼んでね」

「嗚呼、ありがとう……」

夏樹を布団から見送って、少ししてから夢の名残を手繰り寄せる。

曖昧な記憶、しんとした部屋、倒れる前の会話。

そこからはもう、眠れなかった。

「とーこちゃん、あつきー、目を覚ましたよ。大丈夫そうだった」

「そう、良かった……」

「……ねえ、とーこちゃん。……はるちゃんのこと、旅行の間は見守ろうって言ったよね？」

「そうだけど……でも、あんなのを目の前にしたら、私……」

「うん……わかるよ。でも、折角の旅行なんだ。明日だけは様子を見よう？　ね？」

「……わかったわ……ごめんなさい、夏樹」

「ん。いい子。あつきーのことが心配なのはわかるけど、明日に備えて今日はもう寝なよ。お休み」

「ええ、お休みなさい……」

冬子が秋臣を好いていたのは知っていた。

幼い頃からずっと傍で見えてきたのだから、直ぐに気付いた。そしてそれが叶わぬ恋であることも。

彼女は美しく人目を惹いて、頭も良かったし立ち振舞いに品もあるため当然モテた。けれど一途に秋臣を想い続け、他に靡くこともなかった。

最初は、親しい友のそんな不毛な恋を終わらせてあげたいという同情に似た気持ちからだった。それを見透かされていたのか、最初の告白は取り付く島もなく断られた。

それでも、告白を重ね、幼馴染みから一人の女の子として見守る内、気丈に振る舞うその裏で努力や弱音を隠していたこと、強い意思を持ち続ける直向きさ、誰より女の子らしい心の機微。友として接していた頃には気付けなかった彼女を知り、その気持ちは確かに恋心になっていった。

その恋が本物になってから、そして大人になってからは、気軽に告白ができなくなった。

恋人の居る大切な親友に何年も片想いを続けてきた大好きな子。

そんな構図を何も出来ず、今や告白すら出来ず一番傍で見守るだけの俺。

邪魔者が居らず、冬子にとって今がチャンスなのは分かっている。

それでも、春香を想う秋臣の心を守るのも、親友のつとめだ。

板挟みの心境の中、眠れない頭を冷やすように、部屋に敷かれた冷たい布団の中に潜り込んだ。

「おはよう……」

「おはよう秋臣、大丈夫だった？」

「嗚呼、問題ないよ。迷惑をかけた……ごめん」

「迷惑なんてそんな……心配だっただけよ。あなたに何かあったら、私……」

「おつはよー、いやあ、今日も散策日和だね！ いい天気！」

「おはよう、夏樹。相変わらず元気だな……、ところで、春香を見なかったか？」

「え……？」

チェックアウトの時間、宿の玄関先で集合した二人に問う。

あのままぼんやりと夜を明かし、朝改めて確認すると、持ってきた二人分の荷物には手が付けられた形跡がなかった。

春香の着替えも、スマホの充電器も、その他すべて詰めた状態のままだった。スマホはとくに電源が切れているのであろう、メッセージにも既読がつかない。

てつきり冬子と寝泊まりして一緒に来るかと思いきや、彼女は一人だった。

「あー……えっと、はるちゃんさ、目的地だった恋人の聖地、だっけ。待ちきれなかったみたいで、ちよっと先に行ってるって」

「……は？ 春香一人でか！？ 何かあったらどうするんだ！？」

「まあまあ、はるちゃんも大人なんだからさ！」

「……大人……確かに、そうか……でも、春香が一人で……」

気弱で大人しい、僕が居ないと何も出来ない春香。

同じ年とは思えない幼さを残した彼女が、見知らぬ土地で僕から離れて一人で行動するだろうか？

昨夜から、どうにも変だ。頭がずきずきとして、その場でトランクに凭れるようにしてしゃがみ込む。

「！？ あつきー大丈夫？ まだどつか辛い？」

「いや、大丈夫だ……早く春香の所に行かないと……」

「でも顔色が悪いわ、少し休んでからにしましょう？ ……、春香だって、あなたのそんな顔見たくないはずよ」

「……そう、だな……」

彼女の悲しんだり不安な顔は見たくない。

チェックアウトを済ませ、レンタカーの後部座席に横になり暫く休むことにした。

「あつきー、もうすぐお昼だけど、何か食べられそう？」

「嗚呼……僕はまだ要らない。もう少しこうして休んでいるから、二人は気にせず何か食べてきてくれ。ほら、冬子の食べたがっていた海鮮とか」

「……そう？ じゃあ、秋臣の分も何か買ってくるわ。食べられそうな物はある？」

「……春香に、苺を食べさせてやりたい」

「……ん、わかった。とりあえずその店で食べてくるから、店員さんに苺売ってる場所聞いておくね。あつきーはゆつくりしてて」

二人が食事に出ている間、駐車場の車の中で一人ぼんやりとする。

やはり眠ることは出来ず暫くして起き上がると、目的地に程近いであろうそこはどこか見覚えのある景色だった。

初めて来た場所のはずなのに。

既視感の正体を確かめる為に、リュックを漁る。もしかしたら、しおりを作る時に使った写真で見たのかもしれない。そう思っ引つ張り出した一冊は、やはり少しぼろぼろで、改めてもう一冊と見比べる。

「これは……」

使用感のある方を改めて良く見ると、ほぼ同じ内容であるものの、記載されていた旅行予定日が異なっていた。

一年半前。

……どうして忘れていたんだろう。僕は、この町に来たことがある。懐かしさの正体はそれだ。

あの日も春香と二人、あの宿に泊まって、恋人の聖地を見に行ったのだ。

断片的だった記憶を手繰り寄せるように、衝動的に車から出る。リュックを背負い、気付けば目的地へ向かって駆け出していた。

記憶を頼りにどれ程走っただろう。

浜野浦の棚田。

幾何学模様のように幾重にも重なる畦道。海から続く階段のような、斜面を覆う大小様々な形で構成された千枚田。

水の張られたひとつひとつが、空を映す鏡のように揺らいで光る。

それらを臨むように設置された、ハートを模した石台の中央で左右から鎖に繋がれた鐘。恋人の聖地の象徴でもあるモニュメントだ。

その鐘の前で、すべての美しい景色よりも目を惹く愛しい姿を見つけ、息も絶え絶え

になりながら駆け寄る。

「春香……！」

「秋臣くん……」

呼吸を整え、改めて彼女を見ると、一年半前に此处で見た厚手のカーディガン。用意していなかったはずの秋の装いをしていた。

「……ねえ、秋臣くん。田植えの時期、やっぱり綺麗だねえ。お水がきらきらしてる」

「……そうだな……前に来た時は、一面緑だったから……」

「もう少し早かったら、菜の花で黄色かったんだって。それも見たかったなあ」

「なら、来年また来よう……来年まで待てなかったら何度でも来ればいい。冬の雪も、夏の花火も、他の季節だってきつと綺麗だ……」

美しい景色を背景にした、彼女の笑顔。

いつものように写真を撮ろうとして、リュックから出したデジカメを起動させ、不意に、昨日は一枚も撮らなかったことに気付く。

いつもなら、彼女との旅行では必ず何枚も撮っていたのに。

動揺して開いた過去のデータは、最後の写真が一年半前の此处で撮られた物だった。

あの頃と同じ装いの彼女が、春と秋の背景の元、デジカメと現実の中で同じように微

笑む。

「春香……？」

いつもと変わらない彼女の笑顔。

昨夜から感じていた違和感。

鐘のようにがんと痛む頭。

まだ、何かを忘れている。

思い出したくない。

思い出さなくてはいけない。

「……秋臣くん。手、繋ぐ」

「え……？ 嗚呼……」

手を伸ばして、すり抜ける。

彼女に触れることが出来なかった。

「……え……？」

何度試しても、彼女に触れることが出来ない。悪い夢を見ているようだ。

彼女は何かを悟ったように、切な気に笑う。

そうして今度は、スカートをひらりと翻して鐘の設置されたモニュメントの横へと向かった。

左右の穴から手を差し入れて二人で中央の鐘を鳴らす『エターナルロック』だ。

動揺と混乱の中、彼女と反対の穴へと近付いて、手を差し入れ伸ばす。

石台で彼女の姿は見えなかったが、中央の紐を掴もうと伸ばした指先が、今度は確かに紐を握る彼女の手の熱に触れる。

そうだ、あの日もこうして、手を重ね二人で鐘を鳴らしたのだ。

顔を見られないまま、彼女の手の温もりを確かめるように握り締める。

「……ああ、そうだ。四十四番目の恋人の聖地……。あの日、僕は……君に此处でポーズしたんだ。死が二人を分かつまで……うん、死んでも離れたりしないって」

「うん、そうだね……。わたしは、嬉しくて泣いちゃった」

「……君は身体が弱かったから、旅行から戻って、地元の寒い冬に体調を崩した」

「あの時の秋臣くん、わたしより死にそうな顔してた」

「……春になって暖かくなっても、君は良くならなかったね」

「……元々、長生き出来る予定じゃなかったから」

嗚呼、そうだ。

彼女はもう、何処にも居なかった。

それに耐えきれず、僕は、彼女の幻を生み出していたのだ。

「ねえ、わたし達が出会った時のこと、覚えてる？」

「忘れるわけがない」

「小さい頃から病弱で、長生きできないって言われてた。だから、少しでも空気のいい田舎に引っ越してきたの」

「……小学校四年の時だね」

「いつまで生きられるか分からなくて、外遊びの仕方也不知道で、眺めているだけ……。お友達を作るのも怖かった」

「そんな君に、僕が声をかけたんだね」

「うん……秋臣くんに手を引かれて、夏樹くんや冬子ちゃんと仲良くなって……皆で少しずつ外で遊ぶようになって、免疫も体力もついたんだ」

「小学生の頃は入退院を繰り返してたけど、中学に上がる頃には、少し身体の弱い子、くらいになってたね」

昨夜見た過去の夢は、彼女が見せてくれたのだろうか。

彼女と積み重ねた時間のひとつひとつが、大切な宝物だ。

「うん……全部、秋臣くんのおかげ。……わたしは、なれないって言われてた大人になった。……中身は、あんまり変わらなかったけど」

大人になってからは、身体の弱い彼女にお酒は飲ませられないと、少しでも色んな物を見せてやりたいと、四人での集まりは酒の席でなく旅行になった。

彼女の負担にならない程度の、一泊が限度の小旅行。

限られた時間で彼女が楽しめるように、遠出をする時にはしおりを作って、その土地の良い所を冊子に閉じ込めた。

肌寒い時期や体調を崩しがちな時期に、過去のしおりを見ては嬉しそうにする彼女が愛しかった。

「わたし、秋臣さんと出会えて、とっても幸せだったの」

彼女が僕の産み出した幻なら、これは都合の良い妄想なのかもしれない。

幸せだったのは、僕の方だ。

春香の居ない生活なんて考えられない。

多忙だったんじゃない、春香の葬儀を終えてから、僕は生きる気力を失っていたんだ。食べることも眠ることも、何もかもが無意味だった。

だから、無意識の内に、自分を守るために君の居ない記憶を封じた。あの頃と変わらず微笑んでくれる、君の幻に縋った。

それに伴って、最後の旅行になったこの土地への旅行の記憶も忘れてしまったんだろう。四人でのいつもの旅行でなく、プロポーズ目的の二人きりの旅行。

僕が忘れれば、すべてなくなってしまうのに。

夏樹と冬子のためと言いながら、百以上ある恋人の聖地の中から今回この場所を選んだのは、無意識に彼女との思い出を取り戻そうとしていたからなのだろうか。

「春香、僕は……」

最愛の君との思い出を、見て見ぬふりしてきた。

それを自覚した瞬間、握った手の温もりが泡のように消えていくのを感じた。それに縋るよう強く握るのに、手の中をすり抜けていく。

「春香、待って……！　僕を、置いていかないでくれ……」

「……秋臣くん。プロポーズの言葉、もう一度聞かせて？」

「……死が二人を別つまで……否、死んでも尚、心は永遠に、君の傍に寄り添うよ……」

春香、僕と……」

「ありがとう、……わたしも、遠く離れても秋臣さんの心の傍に居るからね」

「はる……、……！」

手の中の温もりが消える間際、彼女の薬指に固く冷たいものを感じた気がした。

彼女の声が、温もりがなくなつて、もう二度と会えないのだと悟る。

二度目の彼女との別れに涙が溢れて止まらない。一人握る鐘の紐を離せずにいると、まるで彼女が励ましてくれるかのように、強い春風が吹き、鐘が一度揺れた。

響く鐘の音が鳴り止むと、今まで感じなかった周囲の人の気配が戻ってくる。

漸く穴から手を引いて、掌の中を確かめる。もう何もない。温もりの名残も、すべて幻だったのかと呆然としていると、追いかけてきたのであろう夏樹と冬子が傍に佇んでいた。

「秋臣……」

「……はるちゃんと、お別れできたんだね……」

傍で見ていた彼等には、最後の春香の姿が見えていたのだろうか。

そう思えるくらい泣きそうな二人の表情に、それ以上聞くことは出来なかった。

「僕はずっと……春香のことを守っているつもりで、守られていたみたいだ……」

「そうね……女の愛の力は、強いんだから」

吹き抜ける春の終わりを告げる風。

水面を揺らし煌めくそれを、僕達は陽が沈むまで静かに眺めた。

旅は終わり、日常へと戻る。

その日以来、彼女の幻が僕の前に現れることはなかった。

部屋の中、ずっと伏せたままだった写真立てを起こす。

彼女の病室で、夏樹がスマホで撮った四人での最後の写真。

写真の前に、二つの指輪と、取り寄せた二種類の苺を置く。赤く熟れたさがほのかと、白い苺とされる桃色がかった淡雪だ。

取り戻した記憶の中の彼女は、その色を紅葉と桜の色と言って微笑んでいた。秋と春、僕達の色。

この先、何度君の居ない春を迎えるのだろう。

伸びきっていた前髪を切った僕は、少しは前を向けるだろうか。

きつと、これからも僕は君を想って涙して、その度に胸が痛んで、虚しくて、苦しくて、また逃げ出したくなるけれど。

それら全て、君への愛の証。君が今も僕の心に居てくれるからなのだと知った。だからもう、忘れて手離したりしない。

僕はこの痛みと共に、生きていく。死すら別つことの出来なかったこの愛を胸に。

いつかまたあの美しい場所で、君に会える、その日まで。